

特別支援学校(病弱)に在籍する生徒の 他者への意識と不安の関連

○川内絵莉子¹ ・ 永井祐也² ・ 竹田一則³

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科,²くらしき作陽大学子ども教育学部,³筑波大学人間系)

KEY WORDS: 病弱教育 公的自己意識 共感性

【目的】

特別支援学校(病弱)に在籍する精神疾患や心身症のある児童生徒の実態や教育的ニーズの探索が近年盛んに行われている(八島ら, 2013; 森山, 2016)。近年では、自閉スペクトラム症などの神経発達症や精神疾患のある児童生徒が一定の割合をしめており、彼らの困難さや教育的ニーズとして、対人関係の問題や、《心理》面のニーズが最も多く、次いで《社会性》のニーズが多くあることが報告されている(森山, 2016)。これまで、病弱児の心理的問題や行動上の問題についてその特徴や実態の報告は散見されるものの、個人ごどのような性質が不適応行動と関連するののかという観点からの研究は極めて少ない。そこで、特別支援学校(病弱)に在籍する児童生徒の自己・他者の感情認知の特性について着目し、不安の感じやすさを示す特性不安を心理的な安定性の指標として捉え検討することとした。本研究では、他者の感情認知の特性について、他者の内面を想像し理解するという認知的要素を含む共感性、自己の容姿や体型、振る舞いなど「他者から見られている自分」を意識する傾向である公的自己意識についても併せて検討し、これらと特性不安の関連について検討することを目的とした。

【方法】

病弱特別支援学校高等部に在籍する生徒のうち、全ての質問紙への回答が得られた24名を対象とし、(1)生徒をよく知る教員と(2)生徒本人にそれぞれ質問紙への回答を求めた。(1)生徒をよく知る教員に対し、生徒一人一人の学校生活上あるいは日常生活上の困難さについて想起を求めた。本研究では、他者の感情の認知や他者に対する振る舞いに関する記述に着目し、得られた自由記述を内容の類似性に基づいて分類した。(2)①他者の感情認知の評価には、登張(2003)の青年期用多次元共感性尺度のうち、共感的関心(他者の不運の感情体験に対して、かわいそう、心配するなど他者に向かう感情的反応が起こる傾向)、個人的苦痛(他者の苦痛に対して、苦痛や不安など、他者に向かわない自分中心の感情的反応が起こる傾向)、気持ちの想像(他者の立場に立って気持ちを想像する傾向)の下位因子を構成する計24項目を用いた。自己意識の評価には、質問項目のわかりやすさを重視し、小学校高学年を対象とした桜井(1992)の児童用自己意識尺度のうち公的自己意識の下位因子を構成する9項目を用いた。特性不安の評価には、顕在性不安検査を用いた。各尺度について、オリジナルに従って得点化し、下位因子同士の相関係数を求めた。(4)倫理的配慮:本研究は筑波大学大学院人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。実施に際し、研究への協力は自由意思であり、参加・不参加によらず不利益はないことを書面で確認した。質問紙への回答を以て、同意を確認した。

【結果】

(1)計25名の教員から、全154の記述を得た。そのうち、「他者の気持ちを理解できない」、「相手の立場に立って考えることが難しい」といった【他者理解の困難】を構成する記述は6つ、「他人に合わせすぎる」、「周りの感情に影響を受

けやすく、疲れてしまう」などの【他者からの被影響性】を構成する記述は10であった。また、「相手が自分の思い通りにならないと相手を攻撃する」、「時に人を傷つけてしまうような言葉を使う」といった【他者への攻撃性】を構成する記述は5つであった。

(2)各尺度の平均と標準偏差、相関係数をTable 1に示す。共感的関心と気持ちの想像、公的自己意識との間に有意な正の相関、個人的苦痛と特性不安との間に有意な正の相関、公的自己意識と特性不安との間に有意な正の相関がそれぞれ認められた。

Table 1 各尺度の平均と標準偏差および相関係数

	<i>M</i> ± <i>SD</i>	<i>r</i>			
		II	III	IV	V
I	3.68±.79	-.14	.51*	.45*	.18
II	2.79±.74		.08	.35	.47*
III	3.17±1.04			.43*	.31
IV	26.04±6.13				.48*
V	26.04±6.13				

I 共感的関心, II 個人的苦痛, III 気持ちの想像, IV 公的自己意識, V 特性不安; * $p < .05$

【考察】

教員による自由記述から、生徒は他者の気持ちを理解しにくい、相手の立場に立てないといった【他者理解】の困難さを呈する一方で、他者の感情に影響されやすく疲れる、ささいなしぐさに反応して落ち込む、怒るといった【他者からの被影響性】の高さが、情緒不安定や不安の感じやすさなどの心理面の課題、【他者への攻撃性】といった行動面の課題と関連している可能性が考えられた。共感(empathy)は一般に情動的共感と認知的共感に分けて考えられる(Daivis, 1983; 梅田, 2014)。「他者の気持ちや状況を理解できない」という状態は認知的共感性の低さが考えられ、不用意に「時に人を傷つけてしまうような言葉を使う」などの行動によって、対人関係にも影響を及ぼすものと考えられた。他方、「周囲の人の感情に影響を受けやすい」という状態は高すぎる情動的共感性によるものと推察された。

他者の感情への認知の指標を共感性、他者からの被影響性の指標を公的自己意識、心理状態の不安定性の指標を特性不安として、各尺度の相関を求めたところ、公的自己意識がたかく、「他者から見られている」ことを意識したり他者の評価的態度に敏感であるほど、あるいは、他者の苦痛を受けて自分自身も苦痛や動揺するといった自己志向的な反応を呈しやすいほど、特性不安が高く不安を感じやすいことが示唆された。これらの結果から、他者の感情への認知は対人関係に影響するだけでなく、時に自己の心理状態にも影響を及ぼし、学校生活や日常生活上の困難さの要因となりうるということが示唆された。

(KAWAUCHI Eriko, NAGAI Yuuya, & TAKEDA Kazunori)